

Title	キャンプ経験による自己概念の変容：男子高校生を対象として
Sub Title	The effect of camp experience upon self-concept of high-school student
Author	野口, 和行(Noguchi, Kazuyuki)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2001
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.40, No.1 (2001. 1) ,p.47- 55
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study was to examine the effect of camp experience upon self-concept and the factors that were changed self-concept in the high-school student who participated in a 4-days camp conducted in 1999. The subjects were 94 male students. To measure Self-concept, the Self-Actualization Scale was administered at the beginning and the end of the camp. To measure the factors that were changed self-concept, the questionnaire including 25 items was administered. The following results were obtained; 1) The camp participants improved in self-concept, particularly in the category of Achievement Motivation and Self-Effort, between the beginning and end of the camp. 2) Five factors that were changed self-concept were obtained; outdoor party, adventure program, camp experience, nature experience, and communication. 3) The high group of evaluated the factors that were changed self-concept showed significantly higher self-concept than low group. The high group of evaluated the factors of outdoor party and communication showed higher self-concept in sub-scale of Self-Effort than low group
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00400001-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00400001-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# キャンプ経験による自己概念の変容

## —男子高校生を対象として—

野口 和行\*

### The effect of camp experience upon self-concept of high-school student

Kazuyuki Noguchi<sup>1)</sup>

The purpose of this study was to examine the effect of camp experience upon self-concept and the factors that were changed self-concept in the high-school student who participated in a 4-days camp conducted in 1999. The subjects were 94 male students. To measure Self-concept, the Self-Actualization Scale was administered at the beginning and the end of the camp. To measure the factors that were changed self-concept, the questionnaire including 25 items was administered.

The following results were obtained;

- 1) The camp participants improved in self-concept, particularly in the category of Achievement Motivation and Self-Effort, between the beginning and end of the camp.
- 2) Five factors that were changed self-concept were obtained; outdoor party, adventure program, camp experience, nature experience, and communication.
- 3) The high group of evaluated the factors that were changed self-concept showed significantly higher self-concept than low group. The high group of evaluated the factors of outdoor party and communication showed higher self-concept in sub-scale of Self-Effort than low group

#### Key words; camp, self-concept, factors

キーワード；キャンプ，自己概念，要因

### 緒 言

野外教育は、自然環境の中で自然を活用して行われる各種の直接体験を通して、自然と人間の理想的な相互関係とそのあり方を追求する生涯学習である。組織キャンプは、野外教育の目的を達成するために組織的に行われる活動で、その目的として、自己の発達、人間関係の改善、自然環境の認識があげられている。その中で自己の発達に関するキャンプの効果研究の従属変数としては、自己概念と自己統制感（Locus of Control）が数多く報告されている<sup>1)</sup>。

一般に自己概念は、その人の行動を規定する内的準拠枠といわれ、人が自分自身をどのようにとらえているかによって、その人の行動様式が決定されてくる。特に人が日常生活の中で次々に取り組んできた課題をどの程度成功裏に達成してきたかという成功・失敗経験と、その課題達成を通じてどの程度周囲の人から評価され承認されてきたかという、承認・否認経験の積み重ねによって自己が発達してくる。

非日常生活であるキャンプにおいて、キャンプ経験が参加者に与える影響を自己概念、不安、一般性自己効力感、自己統制感等の自己に関する変数を用いて、単独あるいは組み合わせて考察を行う研究が多く見られる<sup>2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9)</sup>。しか

\*慶應義塾大学体育研究所助手

<sup>1)</sup>Assistant of the Institute of Physical Education Keio University

し、自己概念の変容に影響を及ぼす要因について検討したものは少ない<sup>10)</sup>。

そこで、本研究では、キャンプ経験による自己概念の変容を明らかにするとともに、その要因を印象に残ったキャンプ場面の観点から明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象

調査対象は、1999年9月2日～5日に、福島県の国立那須甲子少年自然の家で行われた選択旅行「キャンプ」に参加した、男子高校生94名を対象とした。

### 2. キャンプの概要

本キャンプは、2年生、3年生のうちに、いくつかのコースの中から1つ以上を選択して参加するというユニークな形態の修学旅行の一環として1999年から実施されたものである。本キャンプのほかには、北海道でのスキー、八重山諸島でのアウトドア体験、奈良・京都の古都めぐり、森林ボランティア等7つのコースが行われた。

本キャンプでは、自然の中で便利な道具のないシンプルな生活を送ることで、対人関係、自己を見つめ直すきっかけを作ることを目的としている。事前に1回のオリエンテーションを実施し、キャンプの目的や内容について説明した。キャンプ中は9名～10名で班を構成した。指導は野外活動の経験が豊富な専門家があたり、キャンパーの直接の指導にあたっては、キャンプカウンセラーを各班に1名ずつ配置した。

キャンププログラムは、テント周辺環境整備、野外炊事などの一般的なキャンプに加え、ボン・ファイアー、沢登りハイキング、グループビバーク、アウトドアパーティー、選択クラフトが行われた(表1)。

このうち、ボンファイアーはキャンプファイアーを囲んでレクリエーションゲームを行った。沢登りハイキングは、グループごとに場内の沢を2時間ほど登りつめて帰ってくるというプログラムであった。グループビバークは、自然を

表1. 慶應義塾高校選択旅行「キャンプ」プログラム

	9月2日	9月3日	9月4日	9月5日
6:00		朝食	グループ毎に朝食	朝食
9:00	学校発	沢登りハイキング	キャンプ場帰着 休憩(シャワー)	選択クラフト
12:00	キャンプ場到着 設営 キャンプ場散策	昼食 夕食弁当作り グループソロ準備 グループソロ出発	アウトドアパーティー 準備	昼食 撤収 キャンプ場発
18:00	夕食 ボンファイアー	グループ毎に夕食 グループビバーク	アウトドアパーティー	学校着
22:00	就寝			

利用した冒険活動によるストレス体験を手段とした教育プロセスである冒険教育プログラムを意図して行った。少年自然の家キャンプ場内でグループごとにビバーク場所を決め、シェルターを作った。グループビバーク当日は夕方少し雨が降ったものの、大きな天候の崩れもなく、各班とも工事用ブルーシートとロープを使って全員が寝られるような屋根を張り、全員がその中に入って一晩を過ごした。アウトドアパーティーは、任意に配布された食材を使って趣向を凝らした料理を作り、会食形式のパーティーを行った。会食後、グループごとに3日間を振り返った劇、替え歌等のパフォーマンスを行った。選択クラフトは、焼き板作り、フォトフレーム作り、カセットケースを利用したオブジェ作り等のクラフトの中から個人が好きなものを選択した。宿泊はビバーク時を除き、全てテント泊であった。

### 3. 調査及び手続き

#### 1) 調査用紙

自己概念を測定するために、梶田<sup>11)</sup>が作成した自己成長性検査用紙を使用した。また、印象に残ったキャンプ場面を測定するために印象に残ったキャンプのプログラム及びキャンプ場面について25項目からなる質問紙を作成し、「印象に残った」を5点とし、「印象に残らなかった」を1点とする5段階評価とした。

#### 2) 手続き

自己概念調査は、キャンプ開校式前及びキャンプ閉講式直前の2回実施した。印象に残ったキャンプ場面の調査はキャンプ閉講式直前に自己概念調査と併せて行った。一部データの欠落した調査用紙を除き、83名を対象に分析を行った。

自己概念に関してはキャンプ前後の自己概念の変容を検討するために、下位尺度の合計得点の平均と標準偏差を算出し、t検定を行った。

印象に残ったキャンプ場面は、調査項目の構造化のために因子分析を行った。方法は主因子法を用い、5因子を抽出し、バリマックス回転を行った。

印象に残ったキャンプ場面が自己概念に及ぼす影響を検討するために、印象に残ったキャンプ場面の各因子について、上位30%を高評価群、下位30%を低評価群として、測定時期と評価を要因とする分散分析を行った。

結果の処理は、市販の統計ソフトSTATISTICAを用いた。

## 結果と考察

### 1. 自己概念の変容

自己概念の変容について、キャンプ前後における総合得点と因子ごとの得点の平均と標準偏差及びt検定の結果を表2に示した。

自己概念の総合得点においてキャンプ前後で有意な向上が認められた ( $t(82)=2.44, p<.05$ )。また、各因子別にみても、全ての因子において得点が向上し、「達成動機」において有意性傾向が認められ ( $t(82)=1.68, p<.10$ )、「努力主義」において有意差が認められた ( $t(82)=3.55, p<.001$ )。

以上の結果、キャンプ経験は参加生徒の自己概念を高める傾向があり、特に「自分の能力を最大限に高めるよういろいろなことをやってみよう」、「他の人にはやれないようなことをやりとげたい」などに代表される「達成動機」に関わる自己概念と、「一度決めたことは途中でいやになってもやりとおすよう努力する」、「他の人に認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」などに代表される「努力主義」に関わる自己概念を向上させるのに効果が見られた。この結果は、冒険プログラムに参加した小中学生の自己概念の変容を検討した飯田<sup>8)</sup>らの研究や、フロンティアアド

表2. キャンプ前後における自己概念の各因子得点の平均値・標準偏差とt検定の結果

	PRE		POST		t 値
	M	SD	M	SD	
F1: 達成動機	26.53	4.5	27.24	4.06	1.68 <sup>+</sup>
F2: 努力主義	25.6	3.8	27.14	3.65	3.55***
F3: 自信と自己受容	26.34	4.12	26.47	3.85	0.29
F4: 他者のまなざしの意識	27.31	5.81	27.84	5.97	0.93
自己概念総得点	137.67	15.06	141.04	14.37	2.44*

+p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

ベンチャー参加者の自己概念を検討した井村<sup>2)</sup>, キャンプ経験が児童の自己概念に及ぼす影響を検討した関根ら<sup>7)</sup>の研究結果とほぼ一致するものであった。

## 2. 印象に残ったキャンプ場面の因子分析

印象に残ったキャンプ場面を構造化するために因子分析を行った結果, 5 因子を抽出した。各因子の項目内容と因子負荷量を表3に示した。

表3. 印象に残ったキャンプ場面の因子分析

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4	FACTOR 5	共通性
16 アウトドアパーティーでは他の班のパフォーマンスを見たこと	.790					.679
15 アウトドアパーティーで班のパフォーマンスを行ったこと	.711					.681
14 アウトドアパーティーで班のパフォーマンスを考えたこと	.587	.491				.683
18 後片付けをしたこと	.556		.440			.610
19 クラフトをしたこと	.385					.405
7 グループビバークの準備をしたこと		.744				.756
6 ロープワークの練習をしたこと		.706				.638
8 グループビバークでシェルター(屋根)を作ったこと		.645		.511		.724
5 沢登りをしたこと		.566				.391
23 班以外のメンバーといろいろと話したこと			.637			.557
3 初日にキャンプファイアで楽しくゲームをしたこと			.625			.450
2 みんなで初日にカレーライスを作ったこと			.601			.436
17 キャンプファイアの火を見つめたこと			.512	.418		.587
1 火起こしをしたこと	-.433		.478			.564
24 雨や寒さなど、いろいろな天候を経験したこと			.466			.552
21 きれいな景色を見たこと				.674		.567
10 グループビバークで自然の中で眠ったこと				.604		.564
22 きれいな星を見たこと			.575	.586		.681
4 テントの中で寝たこと			.403	.515		.527
12 アウトドアパーティーで料理を作ったこと					.836	.737
11 班のみんなでアウトドアパーティーの準備をしたこと					.768	.678
13 アウトドアパーティーでいろいろな班の料理を食べ歩いたこと					.598	.552
9 グループビバークでみんなでいろいろな話をしたこと					.492	.584
20 スタッフといろいろな話をしたこと					.413	.479
寄与率	2.934	2.993	2.870	2.719	2.629	14.086

第1因子では、「16. アウトドアパーティーで他の班のパフォーマンスを見たこと (.790)」、「15. アウトドアパーティーで班のパフォーマンスを行ったこと (.711)」、「アウトドアパーティーで班のパフォーマンスを考えたこと (.587)」等5項目があった。これは3日目に行ったアウトドアパーティーに関する場面であることから、「パーティー因子」と命名した。

第2因子では、「7. グループビバークの準備をしたこと (.744)」、「6. ロープワークの準備をしたこと (.706)」、「8. グループビバークでシェルター（屋根）を作ったこと (.645)」、「沢登りをしたこと (.567)」の4項目があった。これは、いずれも自然を利用した冒険活動によるストレス体験を手段とした教育プロセスである冒険教育プログラムであることから、「冒険プログラム因子」と命名した。

第3因子では、「23. 班以外のメンバーといろいろ話をしたこと (.637)」、「3. 初日にキャンプファイアで楽しくゲームをしたこと (.625)」、「2. みんなで初日にカレーライスを作ったこと (.601)」、「キャンプファイアの火を見つけたこと (.512)」等6項目があった。これらは、キャンプという非日常的な環境でより強く体験できる場面であることから、「キャンプ経験因子」と命名した。

第4因子では、「21. きれいな景色を見たこと (.674)」、「10. グループビバークで自然の中で眠ったこと (.604)」、「22. きれいな星を見たこと (.586)」、「4. テントの中で寝たこと (.515)」の4項目があった。これらは、自然環境の中で出会うさまざまな場面であることから、「自然体験因子」と命名した。

第5因子では、「12. アウトドアパーティーで料理を作ったこと (.836)」、「11. 班のみんなでアウトドアパーティーの準備をしたこと (.768)」、「13. アウトドアパーティーでいろいろな班の料理を食べ歩いたこと (.598)」、「9. グループビバークでみんなでいろいろな話をしたこと (.492)」等5項目があった。パーティーの準備ではメンバーで創意工夫をしながら、与えられた食材を使って料理を作る等の準備を進めたこと、グループビバークの際にメンバー内でいろいろな話をしながらコミュニケーションを深めていったと考えられることから、「コミュニケーション因子」と命名した。

### 3. 印象に残ったキャンプ場面が自己概念に及ぼす影響

印象に残ったキャンプ場面が自己概念に及ぼす影響を検討するために、印象に残ったキャンプ場面の各因子について、上位30%を高評価群、下位30%を低評価群として、測定時期と評価を要因とする分散分析を行った。

パーティー因子を評価の対象とした結果を表4に示した。「努力主義」において測定時期と評価の主効果が認められた（測定時期：F(1,96)=5.86,  $p < .05$ , 評価：F(1,96)=5.56,  $p < .05$ ）。また交互作用において有意性傾向が認められた（F(1,96)=2.84,  $p < .10$ ）。

表4. 測定時期及びパーティー因子高・低評価群による自己概念得点の平均点・標準偏差及び分散分析

人 数	パーティー因子				分散分析		
	高評価群(H)		低評価群(L)		測定時期	評 価	交互作用
	pre	post	pre	post			
	25	25	25	25			
F1：達成動機	26.40 (5.12)	28.68 (3.26)	27.32 (4.64)	27.60 (3.96)	2.21	0.01	1.35
F2：努力主義	26.40 (2.99)	29.08 (2.52)	25.96 (4.00)	26.44 (3.38)	5.86*	5.56*	2.84+
F3：自信と自己受容	28.08 (3.77)	28.44 (3.08)	26.12 (4.09)	26.24 (3.23)	0.11	8.50**	0.03
F4：他者のまなざしの意識	28.04 (5.09)	28.24 (5.78)	26.96 (5.79)	27.96 (6.63)	0.26	0.34	0.12
自己概念総得点	140.32 (12.52)	147.20 (11.13)	138.56 (16.54)	140.28 (16.01)	2.28	2.32	0.82

( ) 内は標準偏差 + $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

冒険プログラム因子を評価の対象とした結果を表5に示した。自己概念の総合得点において評価の主効果が認められ (F (1,96)=7.60, p < .01), 「他者のまなざしの意識」を除く下位尺度において評価の主効果が認められた。また, 努力主義において測定時期の主効果に有意性傾向が認められた (F (1,96)=3.51, p < .10)。

表5. 測定時期及び冒険プログラム因子高・低評価群による自己概念得点の平均点・標準偏差及び分散分析

人 数	冒険プログラム因子				分散分析		
	高評価群 (H)		低評価群 (L)		測定時期	評 価	交互作用
	pre	post	pre	post			
	25	25	25	25			
F1: 達成動機	27.96 (3.50)	29.31 (3.25)	24.8 (3.88)	25.00 (4.63)	1.03	24.09***	0.57
F2: 努力主義	26.23 (3.65)	28.58 (3.13)	25.20 (3.73)	25.52 (3.83)	3.51+	8.26**	2.03
F3: 自信と自己受容	27.19 (.86)	27.53 (3.34)	25.56 (3.98)	25.28 (3.29)	0.00	7.33**	0.19
F4: 他者のまなざしの意識	27.34 (5.80)	27.65 (6.22)	27.44 (6.21)	28.00 (6.40)	0.13	0.03	0.01
自己概念総得点	140.46 (14.70)	144.62 (12.50)	133.72 (12.96)	136.08 (15.59)	1.38	7.60**	0.1

( ) 内は標準偏差 +p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

キャンプ経験因子を評価の対象とした結果を表6に示した。自己概念の総合得点 (F (1,96)=7.33, p < .01), 「達成動機」, 「自信と自己受容」において評価の主効果が認められた。

表6. 測定時期及びキャンプ経験因子高・低評価群による自己概念得点の平均点・標準偏差及び分散分析

人 数	キャンプ経験因子				分散分析		
	高評価群 (H)		低評価群 (L)		測定時期	評 価	交互作用
	pre	post	pre	post			
	25	25	25	25			
F1: 達成動機	26.84 (5.58)	28.96 (3.61)	25.56 (4.42)	25.96 (4.89)	1.81	5.23*	0.84
F2: 努力主義	26.08 (3.35)	28.20 (3.24)	25.92 (3.72)	26.12 (3.97)	2.62	2.44	1.79
F3: 自信と自己受容	28.40 (4.03)	28.12 (4.16)	25.92 (4.26)	26.12 (3.63)	0.12	14.62***	0.00
F4: 他者のまなざしの意識	27.52 (5.49)	28.04 (5.62)	27.00 (6.89)	28.04 (6.88)	0.39	0.04	0.04
自己概念総得点	141.36 (14.99)	146.48 (12.55)	135.68 (15.94)	135.96 (16.10)	0.81	7.33**	0.65

( ) 内は標準偏差 +p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

自然体験因子を評価の対象とした結果を表7に示した。「努力主義」において測定時期と評価の主効果が認められた (測定時期: F (1,96)=13.87, p < .01, 評価: F (1,96)=9.57, P < .01)。また, 「達成動機」, 「自信と自己受容」において評価の主効果が認められた。

表 7. 測定時期及び自然体験因子高・低評価群による自己概念得点の平均点・標準偏差及び分散分析

人 数	自然体験因子				分散分析		
	高評価群 (H)		低評価群 (L)		測定時期	評 価	交互作用
	pre	post	pre	post			
	25	25	25	25			
F 1: 達成動機	27.28 (5.33)	29.32 (2.98)	25.76 (3.47)	25.56 (4.25)	1.26	10.34*	1.86
F 2: 努力主義	25.96 (2.84)	28.96 (2.88)	24.64 (3.26)	26.36 (3.63)	13.87**	9.57*	1.02
F 3: 自信と自己受容	27.56 (4.29)	27.72 (4.36)	25.92 (3.55)	26.20 (3.46)	0.08	4.02*	0.01
F 4: 他者のまなざしの意識	26.48 (5.69)	27.04 (6.20)	28.32 (5.82)	28.64 (6.05)	0.14	2.09	0.01
自己概念総得点	138.36 (13.71)	144.80 (12.56)	137.12 (12.21)	139.72 (14.19)	2.93	1.43	0.53

( ) 内は標準偏差 + p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

表 8. 測定時期及びコミュニケーション因子高・低評価群による自己概念得点の平均点・標準偏差及び分散分析

人 数	コミュニケーション因子				分散分析		
	高評価群 (H)		低評価群 (L)		測定時期	評 価	交互作用
	pre	post	pre	post			
	24	24	24	24			
F 1: 達成動機	26.42 (5.72)	28.50 (4.46)	26.46 (4.26)	26.54 (3.96)	1.3	1.02	1.11
F 2: 努力主義	25.63 (2.79)	28.88 (3.11)	25.88 (3.89)	26.25 (3.87)	6.62*	2.84+	4.17*
F 3: 自信と自己受容	27.54 (4.59)	27.71 (4.32)	26.41 (3.54)	26.04 (3.10)	0.02	3.03+	0.11
F 4: 他者のまなざしの意識	26.50 (5.63)	27.88 (5.51)	27.25 (6.43)	27.96 (5.89)	0.75	0.12	0.08
自己概念総得点	138.04 (13.53)	145.96 (14.43)	139.08 (16.29)	139.83 (13.22)	2.17	0.75	1.48

( ) 内は標準偏差 + p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

コミュニケーション因子を評価の対象とした結果を表 8 に示した。「努力主義」において測定時期の主効果が認められ (F (1,92)=6.62, p<.05), 評価の主効果に有意傾向が認められた (F (1,92)=2.84, p<.10)。また, 交互作用において有意差が認められた (F (1,92)=4.17, P<.05)。

以上をまとめると, 自己概念の総合得点においては, 冒険プログラム因子, キャンプ経験因子を高く評価した者が有意に得点が高かった。

下位尺度別に見ると, 「達成動機」においては, 冒険プログラム因子, キャンプ経験因子, 自然体験因子を高く評価した者が有意に得点が高かった。

「努力主義」においては, パーティー因子, 冒険プログラム因子, 自然体験因子, コミュニケーション因子を高く評価した者が有意に高く, パーティー因子, コミュニケーション因子を高く評価した者が, 低く評価した者に比べてキャ



ンプ前後に有意に得点が向上した。

「自信と自己受容」においては、パーティー因子、冒険プログラム因子、キャンプ経験因子、コミュニケーション因子を高く評価した者が有意に得点が高かった。

以上のことから、キャンプの各場面を高く評価した者は低く評価した者に比べて自己概念を高く認識することが明らかになった。これは、物事に対するやる気や、困難な課題でも最後まで達成できるといった意識、自らの現状への冷静な意識を持つ者は、キャンプという非日常的空間でのさまざまな体験や、グループビバークという冒険活動によるストレス体験により、困難な課題でも努力すれば達成できるという意識や成功体験を高く意識することを示唆している。一方、キャンプの各場面を低く評価した者が自己概念を低く認識するということは、キャンプのプログラムに対して没入できないことを示していると考えられる。新しい体験にとりくむこと躊躇する生徒に対するフォローアップ、プログラム導入の工夫等の改善が必要であると考えられる。

また、「努力主義」に関連する自己概念において、パーティー因子、コミュニケーション因子を高く評価する者は、低く評価する者に比べてキャンプ前後でポジティブな方向に変容することが明らかになった。3日目のパーティーでは、任意に配布された食材を工夫して班毎にパーティーのための料理を作り、パーティーでは各班でパフォーマンスを考え、みんなの前で実行した。パーティーメニューの作成やパフォーマンスを考える過程で、グループ内でさまざまな葛藤やコミュニケーションがあり、その中で困難な課題でも最後まで達成できるという意識を高めていったと考えられる。これは、対人行動に関する体験要因が自己概念の向上に影響しているという張本<sup>10)</sup>の報告ともほぼ一致した。

## 結 論

本研究は、1999年9月に実施された慶應義塾高等学校選択旅行「キャンプ」参加者94名を対象に、キャンプ経験による自己概念の変容を明らかにするとともに、その要因を印象に残ったキャンプ場面の観点から明らかにすることであった。調査にあたっては、自己成長性検査用紙と、印象に残ったキャンプ場面に関する質問項目を用いた。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. キャンプ経験によって参加者の自己概念、特に「達成動機」と「努力主義」に関連する自己概念が向上した。
2. 印象に残ったキャンプ場면을構造化するために因子分析を行った結果、パーティー因子、冒険プログラム因子、キャンプ経験因子、自然体験因子、コミュニケーション因子が解釈された。
3. キャンプの各場面を高く評価した者は低く評価した者に比べて自己概念を高く認識した。特に、パーティー因子、コミュニケーション因子を高く評価した者は、低く評価した者に比べて、キャンプ前後で「努力主義」に関連する自己概念が向上した。

本研究では、自己概念に影響を及ぼす要因として印象に残ったキャンプ場面を取り上げたが、その要因は本キャンプにのみ適用されるもので、普遍化できるものではない。今後はその要因を普遍的な尺度により測定し、研究を進めていく必要がある。

\* 本研究は平成12年度慶應義塾学事振興資金の補助を受けた。

## 引用・参考文献

- 1) 井村 仁 (1987) 冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究, レクリエーション研究, 第17巻, 第1号, pp. 21-28。
- 2) 井村 仁 (1982) アドベンチャープログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響, 筑波大学体育科学系紀要, 第5巻, pp. 59-70。
- 3) 影山義光・飯田 稔 (1988) 大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容, 筑波大学体育科学系紀要, 第11巻, pp. 39-44。
- 4) 飯田 稔・井村 仁・影山義光 (1988) 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容, 筑波大学体育科学系紀要, 第11巻, pp. 79-86。
- 6) 福田芳則・五林正隆 (1987) オリエンテーリングが自己概念の変容に及ぼす影響, 大阪体育大学紀要, 第18巻, pp. 121-130。
- 7) 関根章文・飯田 稔 (1996) キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力感に及ぼす影響, 筑波大学体育科学系紀要, 第19巻, pp. 85-89。
- 8) 飯田 稔・井村 仁・van der Smissen (1986) 冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変容, 筑波大学体育科学系紀要, 第9巻, pp. 91-101。
- 9) 諫山邦子・奥山 洵・加藤敏之・森 敏隆 (1998) 釧路市の野外教育プログラムの参加者の自己概念の変容, 野外教育研究, 第1巻, 第2号, pp. 13-23。
- 10) 張本文昭 (1996) キャンプにおける自己概念変容とその要因の検討, 筑波大学体育研究科研究論文集, 第18巻, pp. 335-340。
- 11) 梶田勲一 (1988) 自己意識の心理学 (第2版), 東京大学出版会, pp. 152-159。